

伊豆諸島の旅Ⅱ 2022



2022年5月

旅のチカラ研究所 植木圭二

東京都の伊豆諸島は誰でも知っているが、全ての島に行った人は少ない。昨年、私は伊豆大島から神津島までの伊豆諸島の5島に行っており、今回は友人と残りの4島を巡る旅に出た。島にはそれぞれ特徴があり、そもそも島に渡ることさえもが困難な島もある。

第一章 青ヶ島

■目指すは青ヶ島

心地よい風が吹く5月の夜、私は友人とサラリーマンの聖地と言われる新橋の居酒屋で飲んでいる。肴はサラリーマンの聖地ならではの“やきとん”、“モツ煮込み”などであるが、それにも増して旅の話が実によい肴になって大いに盛り上がっている。

一緒に飲んでいるのはヨシさん、彼は前回の伊豆諸島を巡る旅と一緒にいったいわば“島旅の戦友”だ。戦友という時代錯誤の言葉を使った理由は、島によっては簡単に上陸できない島もあるからだ。いわば島に戦いを挑む旅で、事実前回は利島への上陸が叶わず、別途私が1人で行ってきた。今回も最南端に位置する青ヶ島はなかなか手ごわい相手で、難攻不落の島とまで紹介している雑誌もある。

新橋で一杯やってから、竹芝桟橋から東海汽船の「橘丸」5681トンに乗って出航する。

船は時速34kmと比較的ゆっくりと進んでおり、翌朝5時に三宅島、6時に御蔵（みくら）島に寄港して、10時間以上の船旅を終えて約300km離れた八丈島に着いた。

ここ八丈島から青ヶ島に渡る訳だが、ことはそう簡単ではない。

事前に船会社に問い合わせたら、青ヶ島は宿泊施設が少なくキャンプもできないので宿の予約が取れていないと島に渡る船の切符を販売しないと saying いた。船が出るか出ないかはその日の天候次第なので当日販売のみになっている。何しろ船が出る確率（就航率）がおおよそ5割というからそもそも予約は意味がない。宿の予約は取れても、船が出ないことが多いから、まさしく難攻不落の島かもしれない。

私は天気予報を見て、船の出港がほぼ確実に became 昨夜に青ヶ島の民宿に電話して予約した。それはあまり苦労もなく事が進み、いささか拍子抜けの感もあった。その時に民宿の女将から船に乗る時に電話して欲しいと言われていたので、私は思い出したように民宿に電話を入れる。

女将から「港からレンタカーですね」と聞かれて、私が「いいえ」と答えると、「えー違うの、どうするの?」と女将は驚いている。民宿までの送迎を頼むと「娘が港に行くけど、それには乗れない」と言っており、では歩いていくと伝えると、「1時間半以上かかる」とさらに驚いている。

あれこれやり取りの末に、女将に頼み込んでレンタカーの手配をお願いする。女将は快く引き受けてくれたが、この人たちは何も調べずに島に来たのかと思ったに違いない。

青ヶ島行きの船に乗る。船は伊豆諸島開発の貨客船「くろしお丸」493 トン、先ほどまで乗っていた橘丸のおよそ 1/10 だが、最初に見た時の印象はもう少し大きく感じた。最高速度は時速 30km、実際はそれより遅い速度で運航しており、八丈島から青ヶ島までの約 70km を 3 時間で結ぶ。1 日 1 往復しており乗客定員は 84 名だが、本日は 10 人くらいしか乗っていない。

船は青ヶ島に近づく。島は周囲を断崖絶壁に囲まれており、平らな部分は船から全く見えない。まるで人間たちを寄せ付けまいとしているかのようだ。それでも人間たちは断崖絶壁の中でも多少なりとも緩やかな部分に無理矢理に栈橋を造った。栈橋だけで防波堤がないので、ちょっと波が高ければ接岸できないのは容易に想像できる。港から集落へ行くには断崖をくり抜いたトンネルがある。そんな光景に私は驚くばかりで、感情を抑えきれずに思わず「すげえー!」と声を上げてしまう始末だ。

さらに驚くべきことを見つける。私たちの船が着く栈橋の奥に漁船が使う小さな栈橋がある。しかし漁船は係留されていない。ここも防波堤がなく、漁船を係留するスペースもない。係留しても海が荒れた時に破損するか流されるかだろう。そのために漁船は高い場所に陸揚げされており、その揚げ降ろしをするクレーンが設置されている。まさしく聞きしに勝る、恐るべき島だ。



【青ヶ島の港 手前の栈橋の奥に漁船用の栈橋、クレーンとトンネル横に漁船も見える】

■初上陸、初体験

青ヶ島に上陸する。私たちが乗ってきた船はすぐに八丈島に戻るので、島を出る人たちが並んで待っている。その人数をヨシさんが数えると16人だという。

港にはターミナルもなければ売店もない。漁港の倉庫のような場所で切符を販売している。

レンタカーを持ってきてくれたらしいお兄さんと目と目が合った。彼が近寄ってきて「植木さんですか？」と聞き、「はい、植木です」と答えると、彼は「車はあの後ろのハッチが開いた車で」と言うので、見ると軽のワゴン車がある。

運転免許証を見せて借用手続きをするのだが、それは極めて簡単だ。貸渡票という書面1枚を渡され免許証番号や住所・氏名を私が記入し、彼はそれをちょっと見ただけでコピーや写真も撮らずに私に戻して、私は貸渡票と引き換えに代金5000円を支払う。ガソリン代込みの料金で、明日の昼まで、つまり明日の船が出港する時にこの場所で乗り捨ててくれと言う。ガソリン代込みはありがたいことだが、それは走る道が少ないことを意味している。

カーナビは付いておらず、一枚の地図が助手席に置いてあるだけだ。民宿の場所を聞くと、北の方でヘリポート辺りだという。私がペンで地図に書き込もうとすると、その地図はまた使うので、書かないでくれと言うから信じられない。

民宿の女将は、娘が弁当を持って行くから港で受け取るようにと言っていたが、その娘らしい若い娘（こ）が現れる。島の純朴そうな娘を想像していたが、化粧バッチリの都会風の娘が現れたのには私もヨシさんも驚く。今やテレビやインターネットの普及で化粧や衣装などは都会と変わらないのだろう。それにここは東京都だ。その証拠に先ほど借りたレンタカーも、全ての車は品川ナンバーになっている。

その娘から弁当を渡される。彼女は「芋はビニールから出して、他はそのまま地熱釜に入れていいよ」と言っているが、私たち全く事情が分からずキョトンとするばかりだ。詳しい話を聞くと、車でしばらく行くと「ふれあいサウナ」という施設があって、そこに地熱の蒸気を利用した地熱釜があるから、その釜に食材を入れて40分から50分蒸すと出来上がるという。

車に乗って約10分、ふれあいサウナに到着する。地熱釜の中にはステンレス製の籠があって、その中に食材を入れて蓋をして下のバルブを開くと熱い蒸気が出て蒸すという仕組みになっている。



【地熱釜の外観】



【地熱釜の中、そして食材】

地熱釜には男性1名の先客がいて、調理を待っている間に雑談をする。観光客の彼はヘリコプターで来島したというが、なかなか予約が取れなかったという。ヘリコプターは就航率8割で時間的余裕のない人が青ヶ島に来るには良い。定員9人、八丈島から約20分のフライトが12000円なので遊覧飛行を兼ねていると考えるとリーズナブルな価格だ。

もちろん今回私もヘリコプターを考えたが、私は就航率5割の船に賭けることを選んだ。

地熱釜から食材を取り出す。ラップされた炊き込みご飯のおにぎり、生卵、クサヤ、ジャガイモ、ソーセージなど、全てホカホカで適度の水分がある。生卵は茹玉子になっており、その茹玉子やジャガイモには青ヶ島特産の「ひんぎゃの塩」をかけて食べる。クサヤは伊豆大島のクサヤに比べて臭さも味もまろやかで食べ易い。それにしてもこんな昼食は初体験だ。

■島内散策

この島は直径3km弱の楕円形のカルデラ状の火山島で、周囲は険しい外輪山に囲まれている。そのカルデラ（窪地）の中にも比較的新しい小さな火山があつて、そこから熱い蒸気が噴き出している。その蒸気を利用してサウナや地熱釜がある。

島全体が二重火山という珍しい構造をしている。人々はカルデラの中と、外輪山の上に住んでいる。民宿も村役場もヘリポートも民家も、多く集まっているのは外輪山の上で、そのやや平らな狭い部分に施設が集中している。おそらくカルデラの中は噴火の恐れがあるのだろう。



【二重火山の島全景 カルデラの中に火山があり、茶色の土の部分があるサウナ】

役場のホームページによれば青ヶ島村は日本一人口の少ない村で、2019年統計で人口170人、113世帯だという。少ない世帯数かつ狭い島なので住所には番地表示がない。従って役場もレンタカー会社も民宿も“青ヶ島村無番地”という住所表記になっている。

私たちは民宿を目指して車を走らせる。道は軽自動車でないとも走れないような狭い道が入り組んで繋がっているが、どの道も舗装されている。さすがにここは東京都の村、他県ではこうはいかない。

「十一酒屋（といちさかや）」という看板を出した店があるので、立ち寄ってみる。酒屋ではあるが島唯一の食料品店で小さなスーパーといったところだ。愛想のよい娘が対応してくれる。

彼女は島のことを何でも教えてくれる。土産物を聞くと「青酎」と「ひんぎゃの塩」だと言う。焼酎を造っている酒屋があるから行くといいと地図まで出してくれて電話番号を地図に書き入れてくれた。ヨシさんが「その地図に書きちゃっていいの？」と心配そうに話しかけると、彼女は「お客さんにあげますよ」と快く答えてくれる。レンタカーの地図とは大違いの彼女のこの神(紙)対応にヨシさんは驚き、目を細めて彼女を見ている。彼女の純朴で愛想の良さが余程気に入ったらしい。

私は彼女に「おすすめの観光名所はどこ？」と聞くと、彼女は少し困った顔をして「何もないですよ。自然だけ、それも島全体ですね」と返ってくる。

私はその言葉を聞き、思わずハッとす。我に返ったような気持ちになる。

最近の多くの旅行者たちは、どこを旅しても観光名所に立ち寄り、そこに行ったという証拠の写真を撮りたがる。それは私も含めてのことであり、デジタルカメラやスマホの普及でより顕著になっている。

しかしそれが旅の楽しみ方の本質ではないことは薄々分かってはいたが、彼女の言葉で気が付いた。少なくとも青ヶ島にそれを求めるのは間違っており、人間を拒むこの島とその中で暮らす人々の生活を感じるためにやって来たことを改めて気付かされる。

観光名所ではないが、島の生活や歴史を感じられるかと思って金毘羅神社にやって来る。鳥居はいくつかあるが社殿が見当たらない。海が見える見晴らしのよい場所に多くの石と錆びた鉄の鳥居が無残に横たわっており、コンクリートの碑が立っているだけだ。どうやらここが金毘羅神社らしい。パンフレットを見ると、ここは天明の大噴火で無人島になった青ヶ島に帰島するために航海の安全を祈願した場所で、それ以来海難事故が数十年なかったという。これは火山と海という大自然と共存して暮らす人々の祈りの証なのだろう。

尾山展望広場にやって来る。標高約 400m の展望台からは八丈島と八丈小島がかすんで見える。公園の周囲の山肌全体に緑のシートのようなものが敷き詰められている。パンフレットには雨水を集水する設備だと書かれている。水の確保が困難な絶海の孤島ならではの工夫だ。島の暮らしの大変さが伝わってくる。



【金毘羅神社らしき場所】



【尾山展望広場近くの雨水集水場】

再度、ふれあいサウナに行く。このサウナは村営施設で、地熱釜以外にサウナと入浴もできる浴槽がある。

まずサウナに入る。高温多湿の蒸し風呂かと思ったが、一般的な高温のドライサウナに近い。違うところといえば蒸気が吹き出す窓があることくらいだ。窓の大きさは1m×1.5mほどでそこから熱い蒸気が出ている。サウナと言えば水風呂だが、水風呂用の浴槽はあるが残念ながら水が張っていない。この島では水は貴重だからだろう。水風呂には入れないが、湯を張った浴槽があり入浴する。温泉ソムリエの私の分析では、温泉ではなく普通の湯だ。

それを裏付けるように脱衣場には温泉分析書が掲げてある。よく見ると浴槽の湯ではなく、サウナの成分書分析になっている。サウナのガス成分は窒素と酸素だけで大気の成分とほぼ同じだが、温度が25℃以上なので温泉と判定すると書かれている。

私たちがサウナを出て風にあたっていると、ふれあいサウナの隣の建物から1人の若者が出てきた。隣の建物は、ひんぎゃの塩を作っている製塩所で、若者はその従業員らしい。

製塩所から出て来た彼は汗びっしょりでタオルで顔をぬぐっており、いかにもひと仕事してきたという雰囲気がある。私は少し躊躇しながら彼に声を掛けた。

「製塩所で働いているのですか？」と聞くと、彼は「そうですよ」と答える。

「地元の人ですか？」と聞くと、彼は「この4月に青森から来たばかりですよ」と答える。これにはヨシさんも私も驚く。高校を出たばかりらしい。

ヨシさんが「仕事は楽しいですか？」と聞くと、彼は「一日中サウナの中に入るようで、まるで地獄のようですよ」と答える。

汗びっしょりの彼の顔を見れば作業環境は推して知るべしだろう。それは北国から来た彼には辛いかもしれない。しかし彼の様子からは頑張る気概が感じられる。東北の人は我慢強いというから、私とヨシさんは、彼に「頑張って」と言ってサウナを後にする。

ちなみに“ひんぎゃ”とは島の言葉で噴気孔の意味で、製塩には噴気孔から出る熱い蒸気で海水を蒸発させるのでこう呼ばれている。



【白い建物がふれあいサウナ、奥にあるのがひんぎゃの塩の製塩所、右手前が地熱釜】

■ 民宿「かいゆう丸」

民宿「かいゆう丸」に到着する。平屋建てのこぢんまりした宿で部屋数は4~5だろうか、看板が無ければ一見して民宿とは分からない。

島にある宿は全て民宿で、全部で7軒あるが、この宿が一番新しい。何しろ2020年開業と書かれている。女将と2人の娘が手伝って営業している。



【民宿 かいゆう丸】

夕食は6時30分頃からと聞いていたが、サウナに入ったので、私たちはビール欲しさにそれよりもだいぶ前に着いた。すると民宿の食堂のテーブルでは既に一杯やっている輩がいる。うまそうに魚の刺身を食べている。スキンヘッドの彼は一見すると、NHKの番組「グレート・トラバース」で有名になったプロ・アドベンチャー・レーサーの田中陽希に似ている。

荷物を部屋に置き食堂に行く。この民宿はお茶やコーヒーは自由に飲んでよく、酒類は勝手に冷蔵庫から出して箱にお金を入れ、お釣りもその箱から勝手に取るというシステムになっている。

ヨシさんが冷蔵庫から瓶ビールを取り出し、栓を抜いて2人で乾杯する。すると直ぐに魚の刺身が出てきた。今日獲れたカツオの刺身ということで、さすがに新鮮で美味しい。

先客の田中陽希と話始める。

やはり旅や冒険が好きな男で、今日どこに行ったに始まり、旅の話全般で盛り上がる。ヨシさんがマッターホルンに登ったこと、私が来年ブータンに行こうとしていることなど話をすると、あそこはどうだった、こうだったと良く知っている。

青ヶ島はさすがに旅の上級者の島だ。お近づきの印にと彼が吞んでいたボトルの焼酎を勧められる。青酎と呼ばれる青ヶ島産焼酎で先ほどの酒屋の愛想のよい娘から聞いたが、ここで飲めるとはありがたい。サツマイモを原料に麦麴を利用して造られる青ヶ島伝統の味は、芋焼酎と麦焼酎のブレンドのようで美味しい。

ここの女将はこの辺境の島で民宿を女手一つで立ち上げたのだからさぞかし凄いのだろうと料理中の彼女からもいろいろな話を聞く。

この宿を建設する直前、この家の主人つまり女将の旦那が亡くなったという。女将はそれでも故人の遺志を継いで建設を決意したという。その思いに島外に出ていた娘たちも手伝うために島に帰ってきた。ところが開業したとたん世間は新型コロナウイルスが蔓延し全くお客が来ない日々が続いた。それでも半年くらいしてから徐々にお客が増え始めて、今ではほとんど満室だというから凄い。

その成功の理由は女将の人柄や頑張りはもちろんだが、娘が YouTuber でこの民宿や青ヶ島の魅力を発信し続けているも大きく貢献している。

田中陽希はその YouTube (青ヶ島ちゃんねる) を見ながら、「チャンネル登録者数 2.3 万人は凄い！」と騒いでいる。確かにこれは大きな武器で、この辺境な島でも新しい手法で困難を克服している。

私もその動画を見たが、彼女は島の日常を楽しんでいるだけだ。彼女にとっては他愛のない日常でも見ている人には全くの非日常だから面白いのだろう。

そうこう話しているうちに明日葉とツナのマヨネーズ和え、タケノコ、チキンなど次から次に料理が出てくる。6時30分頃になり、「島寿司」が運ばれてくる。島寿司は伊豆大島では「べっこう寿司」と呼ばれており、伊豆大島のものは青トウガラシを漬け込んだ醤油に地魚の刺身に浸けてにぎったものだが、ここ青ヶ島の島寿司は青トウガラシの醤油は使っていない。

そのことを女将に話すと、青ヶ島では普通の醤油を使うが、特に辛いのが好きな人には「島だれ」を出すと言う。私は「それ、食べたいですね」とねだると自家製の島だれが出てきた。島だれは醤油ベースに塩、にんにく、トウガラシなどが入っている。辛いというよりも相当しょっぱい。そしてコクがあって結構美味しい。



【カツオの刺身、タケノコ、明日葉マヨネーズ和え】



【手羽揚げ、島寿司】

そんな事をしているともう2人お客が入って来た。50代くらいの夫婦だろうか、青ヶ島に渡ってきた船の中で会話したことがあって、私が「この宿に泊まっていたのですね」と声をかける。するとすぐに会話に溶け込み、宿泊客5人の宴会が始まる。

夫婦は船で来たが、帰りはヘリコプターを予約しており、その予約が大変だったと言う。ヘリコプターは電話予約のみで奥さんが電話をかけまくったが、なかなか繋がらなかった。結果繋がるまで掛けた電話の回数は254回にもなったという。その回数にも驚くが、電話を掛けた回数を数えていた事に全員が驚く。

■青ヶ島に乾杯

翌日の朝食はパンとサラダ、そしてスープと洒落ている。このセンスが、この民宿が若い人それも女性から人気がある理由だろう。

本日は朝から雨、残念ながら島の自然を楽しむような散策は出来ない。やることもないので早めに港に移動して、レンタカーを停めて雨の海を見ながらヨシさんと2人で缶ビールを開けて乾杯をする。何しろ乗り捨てなのでもう運転する必要がない。

乾杯はこの青ヶ島の自然に、そしてそこで暮らす人々へ敬意を表するとともに、難攻不落の島に挑戦した自分たちを称えたものだ。

船は八丈島に向けて出港する。本日の乗客は4人しかいない。

第二章 八丈島

■八丈島の民宿

青ヶ島から八丈島に戻って来る。戻ると言っても 1 日前には 30 分しか滞在しておらず、初めての来島と言った方が良さそう。

雨の中、昨日予約した民宿「田代荘」の車が迎えに来てくれている。

田代荘はまだ新しい建物で、島の中心地にある。

既に夕方なので今日は民宿の風呂に入って夕食を食べるだけだ。

6 時から夕食というので、その 10 分前に食堂に行くと民宿の主人は、「時間前なのでちょっと待ってください」と厳格だ。少し待って食堂の中に入れてもらいビールを注文すると、これもまた「時間前なので後にしてくれ」と言われてしまう。そこまで時間にこだわる民宿はあまり経験したことがない。

6 時ちょうど、常連客らしき人々が入って来る。何事もなくいつものような会話を主人としているから、この民宿は時間には厳格なのだろう。

その後、民宿の主人に八丈島のことをいろいろ聞くが、実には的確にきき返してくれるのは気持ちよい。宿はその主人の個性が表れるというが、まさしくそうかも知れない。

メインの料理はトビウオで、トビウオの刺身、フライ、煮つけ、それにジャガ・バターは今年の初物だという。それなのに夕食を完食することができなかった。本日は全く運動しておらず、船に乗る前から、乗ってからもビールを飲んでいたので全く腹が空いていない。実にもったいないことをしたと反省しきりだ。

朝食もトビウオの焼き魚、シンプルだがご飯も多い。残念ながら私の胃袋は昨日の夕食がまだ消化しきれしていない。



【田代荘の夕食】

■八丈島の日

八丈島の日が始まる。晴れていれば標高 854m の八丈富士に登るつもりでいたが、昨日の雨はあがっているものの雨模様の天気は変わらずで、レンタカー会社に電話して軽自動車を 1 台お願いする。本日は日曜日だというのに当日の朝に電話しても空いているとは実に運が良い。今回の旅は直前予約が功を奏している。この成功体験が後で裏目に出ないかと心配するほどだ。

車を走らせて八丈島一周道路を時計回りに一周する。

「南原千畳岩海岸」に着く。海の向こうに八丈小島が大きく見える。八丈小島には大平山があるが、島に山があると言うよりも山が島になっていると言った方が的を射ており、標高 616m の大平山が海からそびえ立っているといった感じだ。残念ながら頂上付近は雲がかかっている。

島の北部のくねくねと曲がる細い道を登り切ると、「登龍岬展望台」という眺望の良い場所に出る。展望台には見物客がいて、景色を眺めながら話が弾んでいる。話の内容から地元民らしいので話しかけると、女性 3 人が八丈島の島民で、男性 1 人は島外からのお客だという。さらに詳しく話を聞くと女性たちは読み聞かせの会を八丈島で運営しており、男性は絵本作家で昨日講演会の講師をしたという。

私も来週講演会の講師をするので身分を明かすと、話は旅の話で盛り上がる。そしてクルーズの話になる。

旅に出たいけれども船は嫌だとある女性が言う。それは東京竹芝から八丈島まで 10 時間かけて戻って来たのに船が接岸できないことが 2 回もあって、また 10 時間かけて東京に戻ったのだから、往復 20 時間も揺れる船に乗っていただけだったという。確かにそれは気の毒な話で大型のクルーズ船ならば大丈夫だとか、そんな安易な言葉はもはや無力だと感じる。



【登龍岬展望台からの眺望 正面は八丈富士、その右に八丈小島】

■伊豆七島を聞く

ここで、私が今回の旅の目的について話し始める。

伊豆七島と言うが、実際には有人島は 9 島あって 7 島ではない。単純に 7 という数字の持つ特別な魅力かと当初は思っていたが、そう簡単に結論づけることに疑問を感じてその調査が今回の旅の目的の一つになった旨を話し、そして今までの旅で分かったことを私は話し始める。

式根島は新島の属島で、明治になって移住して有人島になった。今でも 2 つの島は新島村として一体化している。この 2 島は江戸時代の大地震の津波で分離した説があるが、この説は明治初期に企業家が無人島の式根島の払い下げを国に願い出て、これを知った新島島民が危機感を持ち、かつて式根島は新島の一部だと主張する裏付けにした作り話らしい。

青ヶ島は八丈島の遥か南にあって絶海の孤島なので伊豆七島に入れてもらえなかった。昨夜泊まった青ヶ島の民宿の女将も青ヶ島はいつも仲間外れだと言っていた。青ヶ島は 1785 年の天明の大噴火で全島民が八丈島へ逃れ、50 年後に島民が戻ったという記録が残っている。

神津島に伊豆諸島の誕生にまつわる伝説がり、出雲の国から神々が伊豆にやってきて最初に熱海沖に初島を創り、そして神々が集まる島として神津島を創り、神津島を拠点に南北に島を 3 つずつ創った。その伝説に式根島と青ヶ島は出てこない。(詳しくは旅行記「伊豆諸島の旅 2021」参照)

この話をすると、1 人の女性が「青ヶ島は“巫女の島”だ」と言う。巫女の伝説や文化が残っており、彼女は「巫女と言えば沖縄ですよ」と付け加えた。

沖縄と言えば海の向こうにあるニライカナイという神の国が有名で、沖縄の祖と言われる女神アマミキヨはそこから来たという説がある。アマミキヨが降り立った久高島は琉球民族発祥の地と言われており、祭祀を行う施設など多数ある特別な島で、今でも神職の女性が多い。

この説によれば他の伊豆諸島の信仰は出雲の神なのに対して青ヶ島の信仰は沖縄からの流れになる。信仰が異なれば文化や歴史も異なり、青ヶ島は琉球王国に関係する島だったことになる。ひょっとするとニライカナイだったのかもしれない。

また別の女性が八丈富士の横を指差して「有人島という意味では、向こうにある八丈小島には昔は人が住んでいましたよ」と言う。八丈小島は私たちが先ほど見て来た尖った島だ。

彼女たちが小学生の時に八丈小島の全島民が移住し、八丈島内には移住者のための小島地区というのが出来たという。私は「それいつ頃ですか?」と聞くと、彼女たちは顔を見合わせて「年齢が分かっちゃうわね」と言いながら、「40 年くらい前のことよ」と言う。

ということはそれまでは有人島だったことを意味し、有人島を伊豆七島とした説は成立しなくなる。

さらに彼女たちは「八丈島の“八”を 8 番目の島を意味しているのかも」とも言う。式根島を入れると八丈島は 8 番目、式根島を入れなければ初島を入れることになる。八丈島が 8 番目ならば八丈小島は 9 番目、だとすると青ヶ島は 10 番目の島になる。

■八丈島の温泉

伊豆七島問題以外に、私は地元の彼女たちに「おすすめの場所はありますか?」と聞くと、彼女たちは口をそろえて「洞輪沢(ぼらわさわ)温泉と、みはらしの湯は絶対にお勧めよ」と教えてくれた。

その「洞輪沢温泉」にやって来る。小さな洞輪沢漁港の駐車場の端にあって、背後に山がある入浴施設で、漁師たちが漁を終えて入るにはもってこいの温泉だ。コンクリート製の建物で男女別のこの温泉施設は何と無料で入ることができる。無料なのにとすると失礼だが、脱衣場には温泉分析書まで貼ってあるから、しっかり管理していることがうかがえる。やはり八丈町の町営温泉だけのことはある。

湯殿に入ると大きな湯船があり、勢い良く温泉が湧き出ている。それは温泉が出る太いパイプの口を逆さにして湯船に入れているからで、そこから大量の温泉と空気がボコボコと音と泡をたてながら出ている。

温泉成分書には湧出温度 41.2℃と書かれていたので、湯船の湯は 40℃より少し低いくらいだろう。泉質はナトリウム-カルシウム炭酸水素塩・塩化物・硫酸塩温泉で低張性・弱アルカリ泉とたくさん書いてあるが、溶存物質の量は温泉法が定める規定内に入るギリギリだ。むしろ湧出量が 150 L/min ということなので、1 分間で家庭用のバスタブが満杯になる程の湯が出ている。加温しておらず完全掛け流しなので温泉の鮮度は抜群に良い。

その鮮度抜群の湯に浸かっていると、リフレッシュや若返り効果によって実に和やかな気持ちになってくる。漁港にあるので海鳥の鳴き声が聞こえ、磯の香が漂い、大量の湯がボコボコと湧き出ている光景も加わって五感で温泉を楽しめる。

こんな素晴らしい温泉が、無料で入ることができ、しかも誰もいないので貸し切り状態だからたまらない。できればここで漁師たちと会話が出来たら良かったのになどと、2 人で話しているのは贅沢の極みかもしれない。



【洞輪沢温泉の外観と湯船】

「みはらしの湯」にやって来る。ここも町営の日帰り入浴施設だが有料になっており 500 円払って入館する。外観も内部も立派な造りで、入口にはトリップアドバイザーの 2020 年日帰り温泉施設で全国 2 位になったという認定証が掲げてある。

早速温泉に入浴する。みはらしの湯という名前通りの眺望の良さと、露天風呂からは太平洋が一望できる。それもちょっと見える程度ではなく、180 度以上の視野範囲だから解放感は抜群だ。青い海と青い空による太陽光の反射でこの温泉が青く見える写真がポスターやパンフレットに載っているが、ちょっとそこまでの色にはなっていない。

露天風呂から出て内風呂に浸かって外を見るとこれもまた素晴らしい。内風呂と露天風呂の間には一応仕切りがあるが、お湯が溢れ出ているように見え、いわゆるインフィニティ風呂になっている。内湯と一体になった露天風呂、そしてその向うに太平洋が見える。

泉質は実に濃い。溶存物質が温泉法の規定の 36 倍も入っているからで、濃い湯で有名な有馬温泉には及ばないもののそれに迫るものだ。ただしこの温泉は海に近いので、成分の多くは海水が入り込んでいるのだろう。その証拠にかなりしょっぱい。

温泉分析書では湧出温度 47.5℃、pH7.0、含よう素-ナトリウム-塩化物強塩温泉で高張性・強塩・高温泉となっている。湧出量は 500 L/min と書かれているから先ほどの洞輪沢温泉の 3 倍になる。

さすが全国 2 位の実力を思い知った。気になる 1 位を調べてみると香川県高松市の仏生山温泉の天平湯だという。残念ながら私は行ったことがない。



【みはらしの湯の内湯から露天風呂を見る】



【みはらしの湯の露天風呂】

「裏見ヶ滝」にやって来る。その名前どおり滝を裏から見る事ができる滝だが、水量が少なく迫力は今ひとつだ。滝の近くには「裏見ヶ滝温泉」があり、本当はそちらが目当てだったが残念ながらポンプの故障で閉鎖されている。この湯も町営の無料施設で、男女混浴なので水着を着て入るルールになっている。

「ふるさと村」の近くには「玉石垣」という玉石と呼ばれる丸い石で作った石垣が多く残っている地域がある。八丈島ならではの光景だと、民宿の主人が今朝教えてくれた。

石垣は丸い石で組まれており、かなり珍しい。丸い石は崩れやすいのに何故こんな丸い石だけ使って作ったのか、その理由が気になるところだ。パンフレットには、関ヶ原の合戦で敗れた宇喜多秀家が八丈島に流されたのを最初に幕末までに 1917 人が八丈島に流された。これらの流人が島民から食料をもらうため海岸から丸い玉石を運び上げて積んだという。いわば流人の生活の糧になった石垣だ。



【玉石垣】

標高 854m の八丈富士の中腹にある「八丈富士ふれあい牧場」にやって来る。

牧草地の中に真っ直ぐ延びる遊歩道の先に展望台があって、正面にそびえる標高 700m の三原山をはじめ、空港や港、そして太平洋を一望する大パノラマが目の前に広がる。振り向くと牛の親子がのんびりと草を食べる風景がありその背後には八丈富士がそびえている。つまりここに来ると八丈島全部を見ることができる。それゆえ八丈島に来て最初にこの牧場にやって来る観光客が多いという。



【八丈富士ふれあい牧場からの眺望 正面は三原山、空港、港】



【八丈富士ふれあい牧場と背後の八丈富士】

■御蔵島の予約が取れない

民宿に戻り、明日の予定をヨシさんと話し合う。計画では八丈島の隣の御蔵島に行くことになっている。御蔵島も船が着くことが困難な島で、渡っても帰りの船が着かないことも多いので、青ヶ島同様に宿の予約が乗船の条件になっている。それは知っていたのだが、今回の旅は最難関の青ヶ島に渡ることを最優先にしていた。それが予想以上に上手くいったので御蔵島なんか軽いと高を括っていた。

ところが御蔵島の宿の予約が取れない。宿は全部で7軒あるが、1軒は電話が繋がらないが、他はどれも満室だという。

私たちは善後策を検討し始める。八丈島に連泊して翌々日に御蔵島を目指すか、とりあえず御蔵島を後回しにしてその先の三宅島に行き、一泊してから御蔵島に行くという選択肢がある。以前、大島から海が荒れて利島に渡れずにその先の新島に渡ったことがあったが、その時と同様に御蔵島の先にある三宅島を目指すことにした。

■創作郷土料理

民宿の2泊目は素泊まりにしており、近くの郷土料理屋にでも入ろうかと外に出る。日曜日ということもあってか何件かは閉まっているが、創作郷土居酒屋「エイト」という店を見つけた。入口はいかがわしいスナックのような構で、普通ならば少し躊躇するところだが、他に店もなく2人一緒なら何とかなるだろうとドアを開ける。

店内はカウンターとテーブル席があって、カウンターには既に先客1人が座っている。年の頃なら30代で観光客だろう。私たちがカウンターに座り、彼に声を掛け話始める。彼は観光客で、本日は電動アシスト自転車を借りて島を回ったが、電源を入れ忘れたためにほとんどを自分の脚力だけで回ったと言っている。私たちは車を使ったが、あの道を自転車、それも電動アシストのアシスト無とは恐れ入ってしまう。

出てきた料理はなかなかのもので、クサヤピザ、シイラのフライ、島トウガラシのモロキュー、どれも島の焼酎に合って美味い。クサヤピザは青ヶ島のクサヤのように臭いも味もまろやかで、島トウガラシは、あの島だれを使っており辛くしょっぱい。

カウンターの中で料理を作っている若い店主にも話し掛ける。郷土料理でなく、なぜ創作郷土料理なのかを聞くと、彼は「私は関西出身で、地元民ではないので本物の郷土料理では勝負できないから、現代風アレンジを加えているだけです」と言っている。

日曜日の夜ということで、店主の友人たちがぞくぞくと集まって来る。島内の他の店を経営している移住組で、そんなコミュニティが出来ているようだ。創作料理もそのコミュニティから生まれたものだろう。



【島の焼酎「八重樫」】

帰り道で明日の朝食を買うためにスーパーマーケットに立ち寄る。ここでまた珍しいパンを見つける。何と「クサヤパン」だ。早速買って宿に戻る。

■八丈富士に登る

八丈島の最終日、私もヨシさんも八丈富士登山を諦めきれないので、朝早く起きて八丈富士を目指すこととした。天気は昨日同様で雨は降っていないが晴れてはいない。ただし天気予報では回復傾向にある。

夜が明け始めて4時30分に民宿を出発する。三宅島行きの船は9時40分に出るが、レンタカーは8時まで返却する約束をしているので、それまでの時間を使って標高854mの八丈富士登山に挑戦する。

車を走らせ15分程で登山口駐車場に着く。この駐車場で標高550mくらいだと、私の腕時計の高度計は示している。しかしここは雲の中、深い霧で何も見えない。霧の中を登山するか、駐車場で霧が晴れるまで待つことになるが、その後の予定を考えると待つ時間を決めて登ることにした。

5時ちょうど登頂開始。日の出の時間は過ぎているが、うっすら明るいだけで太陽の存在さえも感じない。霧のため視界は10mもない。

登山道は整備されており、全て石の階段という立派な登山道が続く。歩き始めて 15 分過ぎた頃に「半分の 640 段」と書かれた標識を見つける。そして登山口から 30 分かけて 1280 段を登り切る。

視界が悪く、風も強い。昨夜買ったクサヤパンをかじりながら一時の休憩をする。

八丈富士の火口は直径 500m、深さ 70m というからかなり大きい、霧の中なので何も見えない。その火口を一周するお鉢回りには 60 分かかると標識に書かれている。火口の底にも降りることができ、底には浅間神社があって、神社の横には直径 200m、深さ 100m の穴があると書かれている。地下森林になっているというのでこれも面白そうだが、本日はここまでにして下山する。

第三章 三宅島

■三宅島一周

八丈島を出て、約 1 時間で船は三宅島の港に着く。

そして珍しいものを見つける。一緒に船を降りた若者が少し大きめの黒い袋から取り出して何か組み立てている。それは何と、電動キックボードだ。彼はそれを 5 分くらいで組み立てて、私たちの目の前を快調に飛ばして過ぎ去っていった。

これには私もヨシさんも驚くばかりで、こんな手段があったのかと感激する。

電動キックボードはかつて免許不要だったが、法令が整備されて現在は原付バイクの扱いになるのでナンバープレートにヘルメットが必要になるが、それでも便利なものだ。特に離島にもってくるなどとは思ってもいなかった。



【電動キックボードの若者】

乗船直前に本日の宿「民宿みなと」を予約した。当日予約それも直前なので港に迎えには行くが少し遅れる旨を聞いていた。おかげで電動キックボードを見ることができた。そして実にいいタイミングで民宿の主人が車で迎えに来てくれた。

車に乗り込み、早速話が始まる。私たちは暇な観光客で、村営バスで三宅島一周をする方法やその時間を聞くと、何とありがたいことに「私も暇なので、これから一周しましょう」と言ってくれる。私たちは二つ返事でお願ひする。

時計の針と反対回りで三宅島一周が始まる。一周約 30km、それをガイド付き観光で案内してくれるからありがたい。

約 2000 年前に噴火した火口に水が貯まった「大路池」は、噴火を感じさせない程に木々が多い自然の中にある。そのため鳥が多く住み着いてバードウォッチングには最適だと教えてくれる。そしてこの地下の水源が今では三宅島の水源になっていることも教えてくれる。

この民宿の主人は実に良く知っており、それも知っているだけでなく実に的確に数字が出てくる。

「七島展望台」はその名の通り伊豆諸島の7島が見える。その7島とは大島、利島、新島、式根島、神津島、御蔵島、八丈島まで見えるというが、青ヶ島は書かれていない。こういう場所から伊豆七島という言い方が生まれたのかもしれない。

その反対側、つまり背後には「雄山（おやま）」がそびえ立っている。高さは775mしかないが、山体がとにかくでかい。この山が三宅島そのものだと言ってもいい。島全体が火山というのは伊豆諸島の島では当たり前だが、その中でもこの三宅島の雄山は群をぬいて大きい。頂上部には直径約3.5kmのカルデラがあり、その内側には直近の噴火によって新たに直径約1.6kmのカルデラが形成され、その深さは約500mもある。三角すい型の利島を逆さにすると、すっぽりこの雄山の火口に入ると民宿の主人が教えてくれる。

その言い方から「どうだ、凄いだろう」と自信満々にも聞こえる。



【雄山の山体】

三宅島の歴史は火山噴火の歴史と言っても良い。ここ最近の500年間で13回の噴火が起きており、明治時代以降でも5回ある。その中でも直近の1983年と2000年は記録がたくさん残っている。

1983年の噴火では、火口から出た溶岩が住宅密集地の西方面に流れ出て民家を飲み込み、溶岩流は小中学校の鉄筋の校舎で止まった。

民宿の主人の話では、この地区には温泉が湧き各民家も温泉を引き毎日温泉三昧という優雅生活を住民はしていたが、無残にも全てが溶岩の下になってしまった。主人は「優雅な生活に罰が当たったのさ」と言っている。



【小中学校の校舎で止まった溶岩流】

彼の生家はこの溶岩の下に埋もれており、その彼は幾分寂しそうな顔になっている。

現在は家々を飲み込んだ溶岩を見るために火山体験遊歩道が整備されている。

2000年の噴火で北東部にある「椎取（しいとり）神社」の鳥居は泥流で埋もれた。今は新しい社殿と鳥居があるが、頭だけ出しているコンクリート製の埋もれた鳥居もあるから、これはいささかショッキングな光景だ。



【椎取神社の現在の鳥居】



【椎取神社の昔の埋もれた鳥居】

民宿にチェックインして、近くの温泉施設「ふるさとの湯」に行く。伊豆諸島のほとんどの島には無料もしくは格安で入浴できる温泉施設があるのがありがたい。



【ふるさとの湯の露天風呂】

ふるさとの湯は海に近いのでかなりしょっぱく、温泉濃度は濃い。温泉の色も濃いので有馬温泉に浸かっているような気分になる。ただ有馬温泉よりも景色は遥かに良い。

内湯からも海が見えるが、露天風呂の方が海を感じながらの入浴になる。広く開放的で海風が気持ち良い。

■ 民宿はコミュニティの場

民宿に戻り、夕食までの時間を使って御蔵島の宿の電話を掛ける。明日こそは思っていたが、結果は昨日同様だ。私は御蔵島を甘く見ていたと今になって思い知り、今までの成功体験がむしろ弊害になっていることに気が付いたが、後の祭りだ。もう一泊延ばすことも考えたが、これは仕切り直して御蔵島だけ別途挑戦しようとは今回は断念することをヨシさんと決める。

夕食の準備ができたとのことで食堂に行き、御蔵島の宿が取れなかったことを民宿の主人に話すと、「やっぱりね」という言葉が返って来る。彼は多くの人たちが御蔵島に渡れないで悔しがる姿を見てきたと言っている。

食事は味噌汁やお茶まで最初から全てテーブルの上に用意されており、ご飯は自分で盛るようになっている。その理由は、食事を出してしまえば後は手を抜けるからだ、と、民宿の主人は言っている。

私とヨシさんはビールを頼んで乾杯をする。そこに少し遅れて主人も加わり、宴会が始まる。

昨日までは10人くらい泊まっていたというが、幸いにして本日のお客は私たち2人だけで主人もすっかり楽な気持ちらしく、話はどんどん盛り上がる。

この民宿は6室、定員18名ということで、これを1人で切り盛りしているという彼の言葉に私もヨシさんもこれを驚いてしまうが、奥さんはいるのですかなどとも聞けずにいると、彼の方から身の上話が始まる。

現在彼はアラカン（アラウンド還暦）で結婚もしている。数年前までは奥さんとこの民宿をやっていた。民宿経営は夫婦の努力によって順調に推移して、さらに事業拡大のために奥さんが島内の別の地域でホテルを始めることになった。彼の話では奥さんはかなりのやり手のようだ。そのやり手の奥さんと一緒にホテル経営に移る訳だったが、手違いでこの民宿のお客の予約を受けてしまった。そのため1人で2~3カ月営業していたら、それはそれで楽しくなり、1人でも何とかなることも分かり、以降はそのままの状態で営業することになったという。

彼は三宅島生まれ、八丈島育ちの元漁師でということもあって、地元産の食材にはこだわる。本日も地元食材のみの料理で、明日葉の天ぷら、鰹の焼き魚、アカイカの刺身、島でとれないのは、てんぷら粉くらいだと言っている。

主人のサービスで焼酎が出てきた。八丈島の友人が送ってくれたという「江戸酎」は実に美味しい。青ヶ島や八丈島で飲んだ焼酎と同じ芋と麦の合体だ。

主人は朗らかで、人生の酸いも甘いも知っており行動力もある。地元の人たちだけでなく初めて会った旅人も語りをするのが好きで、老若男女に親身になって話をするので若者たちからも人生相談なども受けるという。だからリピータも多く、本日のような宴会を人数の多少に関係なく毎日実施していると言っている。それは昔のユースホステルのようなものかもしれない。



【民宿の夕食】



【中央が民宿の主人、右はヨシさん、左は私】

物知りでもある彼に期待して、私はここでまた例の伊豆七島問題を聞いてみた。

彼の回答は実に分かり易かった。

それは、「伊豆諸島という名前が示すように、これらの島はかつて伊豆の国だった。だから伊豆半島から見える島々を言うのではないか。それは大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御蔵島までの7島で、青ヶ島はもちろん八丈島も見えない。だから伊豆半島から見える範囲の島のことでしょ」と言っている。

私もヨシさんも目から鱗状態だ。

昔のことだから領土を言う時には、「あそこから、あそこまで」などと見える範囲を指すのは至極当たり前の話だ。これは腑に落ちる。

■最終日

船が出るまで多少時間があったので、役場の隣にある「三宅島郷土資料館」を訪れる。三宅島の噴火の歴史や郷土の芸術家の作品を展示している施設だが、ここで実に興味深い展示を見つける。

それは「三宅記」というもので、富賀（とが）神社の縁起だという。縁起とは起源・由来の言い伝えのことで、伊豆諸島の由来が書かれている。この縁起は三宅島と新島にあり、新島のものには文明 13 年（1481 年）との記載がある。

その内容は「天竺の王子が日本にきて 7 日 7 夜で 10 の島を造った。初めに初島、次に神が集まる神津島、3 番目は大島、潮の泡を寄せた新島、3 つの家の姿に似た三宅島、明神の倉にする御倉島、はるか沖にある八丈島、八丈小島、そして青ヶ島、最後に利島と名付けた」書かれている。

興味深いのは初島を含めているが式根島がなく、八丈島小島や青ヶ島まで入れて 10 島にしている。式根島は明治時代に移住が始まったので、それまでは無人島だから有人島の 10 島を選んだのかもしれない。

船に乗って三宅島を離れる。東京湾に入る頃には日が暮れ始め、東京湾の夜景を見ながら竹芝栈橋に帰港する。

この 6 日間の旅は短いようで長い旅になった。それは中身の濃い充実した旅を意味しているのだろう。

しかし御蔵島の再挑戦という課題も残った。いや課題ではなく楽しみと言った方がいいだろう。好きな料理は残しておいて最後に食べるということなのかもしれない。

第四章 旅を終えて

■伊豆七島問題を検証する

旅から戻って、私は三宅島の民宿の主人が言っていた伊豆半島から見える島を検証してみたくなった。

私は以前、ソムリエの田崎真也の講演を聞いたことがあり、彼は海が大好きで船乗りになりたかったと言っていた。

そして私たちが海を見るときに一体何 km 先の海面まで見ているのか興味を持ったという。地球は丸いので、あるところまでしか見ることが出来ない。

その答えは、 $\sqrt{A \times 3569m}$ という数式で A のところに見ている視点の高さをメートルで入れると求められるという。つまり目線の高さが 1m ならば $\sqrt{1}=1$ なので 3569m 先まで見える。この数式は便利で当然その逆にも使える。例えば富士山は 3776m、数式にそれを入れると約 220km、障害物がなければ三重県でもギリギリ見えることになる。

この数式に八丈富士の高さ 854m を入れると 104km になる。つまり 104km 以上離れると見えないことになる。ただし見えるといっても 104km の場所では八丈富士の頂上しか見えないので、もう少し余裕がないと島として認識できないだろう。

伊東から八丈島まで直線距離で 200km 以上離れているから見ることは不可能だ。

御蔵島は伊東からは直線で 125km、御蔵山の御山は標高 851m なので、このままでは見えない。伊東の大室山（標高 580m）に登れば見える距離なのだが、大室山からだると御蔵島は三宅島に隠れてしまう角度になる。伊豆半島最高峰の天城山（標高 1405m）に登れば新島と三宅島の間に御蔵島がかすかに見えるだろう。

そうすると御蔵島までで 7 島、これは八丈島の“八”は 8 番目の島を意味しているという説にも合致する。

伊豆半島から見える範囲の伊豆諸島とは、明治時代まで無人島で新島の島民が便利に使っていた式根島を入れずに 7 島になる。有人島だけにした理由は支配者にとって人が住んでいるか否かは税の取り立ての面で重要なことだからだ。従ってかつての伊豆七島とは、現在の静岡県初の島、そして東京都の伊豆大島、利島、新島、神津島、三宅島、御蔵島だったに違いない。

そして三宅島に渡れば 8 番目の八丈島、9 番目の八丈小島が見えて、八丈島に渡れば 10 番目の青ヶ島が見える。これは三宅島郷土資料館の三宅記に書かれているように神が 10 の島を創ったという内容に一致する。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひよい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。

評価の基準は、5 は驚き感動、4 は普通に良い、3 は可もなく不可もない、2 は普通に悪い、そして 1 は失望落胆としている。

どの宿も温泉宿ではないが、記録に残すために評価項目を限定して評価する。

青ヶ島「かいゆう丸」は泉質-、風呂-、料理 4.5、コスパ 4、サービス 4、建物・部屋 3、立地環境 5、総合点 4.10 になった。

八丈島「田代荘」は泉質-、風呂 3、料理 4、コスパ 3.5、サービス 2、建物・部屋 4、立地環境 3、総合点 3.25 になった。

三宅島「民宿みなと」は泉質-、風呂-、料理 4、コスパ 5、サービス 5、建物・部屋 2.5、立地環境 3、総合点 3.90 になった。

■旅の記録

旅行は 2022 年 5 月 19 日（木）～5 月 24 日（火）の 5 泊 6 日で実施され、行程を以下に記す。

・1 日目 夜ヨシさんと落ち合い夕食をとって竹芝桟橋から橘丸乗船、22 時 30 分出航、

- ・ 2 日目 8 時 55 分八丈島着、9 時 30 分くろしお丸に乗船、12 時 30 分青ヶ島着
港でレンタカーを借りてふれあいサウナで昼食、金毘羅神社、尾山展望広場、
十一屋酒店で買い物、民宿「かいゆう丸」にチェックインし、村内主要部を見物、
ふれあいサウナで入浴して民宿に戻る
- ・ 3 日目 10 時 40 分に宿をチェックアウトし、ふれあいサウナに立ち寄り
12 時 50 分くろしお丸乗船、15 時 50 分八丈島着、民宿「田代荘」の迎車で宿到着、
- ・ 4 日目 8 時宿にレンタカーを持ってきてもらい島内ドライブ、南原千畳岩海岸から
八丈島一周道路を時計回りに一周、登龍岬展望台、洞輪沢温泉に入浴、
みはらしの湯に入浴、浦見ヶ滝、ふるさと村、玉石垣、八丈富士ふれあい牧場
宿に戻って、夕食は創作郷土居酒屋「エイト」で外食
- ・ 5 日目 4 時 30 分宿を出てレンタカーで八丈富士登山口まで行き、八丈富士登山、
レンタカー返却し、9 時 40 分八丈島出港、三宅島 13 時 25 分着、
伊ヶ谷港から民宿「みなと」の迎車、
民宿の主人の案内で 2 時間かけて時計の針の反対回りで三宅島一周観光、
民宿にチェックインし、ふるさとの湯に入浴
- ・ 6 日目 朝 8 時 40 分宿を出発し島内散策、コシキの穴、火山体験遊歩道、ふるさとの湯入浴
12 時宿の戻り、13 時 35 分出港の橋丸に乗船して 19 時 40 分東京竹芝棧橋帰港、
打ち上げを東京駅で行い

費用は約 7 万円（正確には 68325 円）になった。内訳を以下に示す。（1 人分の費用に換算）

- ・ 宿泊費 33605 円
 - 青ヶ島「かいゆう丸」 11500 円（1 泊 3 食 11000 円＋翌日の弁当 500 円）
 - 八丈島「田代荘」 14305 円（1 泊 2 食と素泊まりの連泊）
 - 三宅島「民宿みなと」 7800 円（1 泊 2 食）
- ・ 交通費 28420 円
 - 竹芝棧橋→八丈島 9100 円（特 2 等、35%オフの東海汽船株主優待利用）
 - 八丈島⇄青ヶ島 5900 円（片道を 2 回分）
 - 八丈島→三宅島 1580 円（2 等、35%オフの東海汽船株主優待利用）
 - 三宅島→竹芝棧橋 4840 円（2 等、35%オフの東海汽船株主優待利用）
 - 青ヶ島レンタカー 2500 円（ガソリン代込み 5000 円を 2 等分）
 - 八丈島レンタカー 3000 円（95km 走行のガソリン代合わせ 6009 円を 2 等分）
 - 自宅⇄竹芝棧橋 約 1500 円
- ・ その他 6300 円
 - 青ヶ島のふれあいサウナ入浴 300 円
 - 三宅島ふるさとの湯入浴 1000 円（500 円が 2 回）
 - 酒、つまみ、昼食など 約 5000 円